北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1997. 1.10

第18巻4号

通巻140号

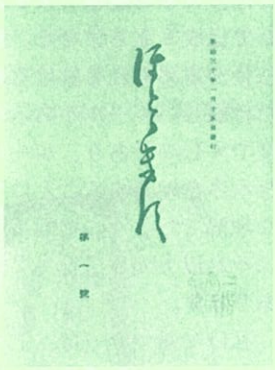
Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

39にして『猫』、そして「青春3部作」
40にして東大を去り、野に下る
文豪漱石の「大爆発」を信じた 夢ホトトギス

書彩星彩 ④
―天にもらった命なら

かえりなんいざ 帰去来、故国まさに荒れなんとす

霧のロンドン。
1902年（明35）、12月5日。
35歳の漱石は狂わんばかりに、テムズ河を下る。
時局は動いていた。
この年、日英同盟成立。そして日露開戦前夜。
「この国は亡びるな」。
漱石は唸（うな）るように呟（つぶや）いた。
「すまないことをした」。
すでに、9月18日、この世を去っていた子規への後悔の念が漱石を責めてもいた。
地中海。くつろいだ陽光。
「妙に腹が減る。海はくすりなのか」。
インド洋。白雲が湧いている。
「天にもらった命か。維新の志士たちは妻子をかえりみなかった。生と死をかけて」。
東シナ海。故国が近づいている。
「熊本の那美さんはどうしているか。小天（おあま）の海か。坊ちゃんは伊予のターナー島でいい」。
漱石の中に偉大のマグマが動いた。
49日間の航海を終えたのは、
1903年（明36）、1月23日。
すでに、漱石は船上で、1月5日、36歳。
女々しき漱石。雄々しき漱石として帰る。
3年後に、あの「青春の大爆発」を見る。それは、あまりにも遅かりし晩熟の発露だった。



「ホトトギス」。柳原極堂により明治30年1月15日、松山で創刊なる。20号まで。後、東京に移る。

ここに世は明治30年と変わりて
文運は南海の空に方（あた）りて
稍盛ならんとするの兆あり
正岡　子規
一八九七年（明30）一月十五日
『ホトトギス』創刊第1号
（子規全集第4巻p574）

目　次　ドライバーにも優しく（堂柿栄輔）／調査地での読書（須田一弘）／中小企業をみる眼（山田誠治）／ジョンバチェラー博士の郷里を訪ねて(1)（コーニッシュ篁子）／アラビア紀行②（大江敏美）

ドライバー

私は工学の分野で、専ら調査から得た統計データを分析し、路上駐車の管理や規制の方法を研究していますが、最近古事記の入門書を読みました。統計データの分析と言いますと、最もつまらない、そして役に立ちそうにない研究をしているのだと思われそうですが、このテーマで新しい提案をする時、道路交通法に代表される法律の理解をどうしても避けて通れません。日本人にとって法律、言葉がどのような意味を持つのか。丁度、若手の歴史家が、言霊信仰なる表現で、日本人が言葉に対して持つ独特の信仰を説明している本を読みましたので、日本の一番古い歴史から理解しようと思ったわけです。

路側に5分以上長く止めると法律違反になりますし、時速40km以上の速度で走ることはやはり違法行為です。しかしこれらのことは今までも続いてきたし、これからも続いていくでしょう。例えば、日本の流通システムは道路交通法を守っていては成り立ちません。なのにどうしてこの様な法律が認められる続けるのか。その理由は、これだけ厳しいルールがあるから、違法行為もこの程度ですむのであり、ルールの基準を緩めることは無秩序を増長することになる、というのが一般的な理解でしょう。でもルールの基準を緩め、同時にそれ以上の違法行為には厳格に対処する方法もあります。

私は交通マナーは、ドライバーのおかれた交通環境でつくられるのだと思っています。だから交通マナーを良くするには、ドライバーに無用の我慢を強いないことが必要と考えています。親切をうければ親切で返しますし、意地悪をされれば意地悪で返すのが自然です。場所は忘れましたが、踏切で降りている遮断機を、何台もの自動車が壊して通行する様子が、以前テレビで紹介されたことがあります。言語同断と思われるかもしれませんが、そうではありません。遮断機は、最寄りの駅で停車中の列車のためにも常に閉められます。この制御技術の進んだ時代に、なぜ停車中の列車のために延々と通行止めとするのか、ここにはよりスムーズに自動車を流そうという発想、ドライバーへの優しさがありません。また道路を横断中の歩行者に、容赦なくクラクションを鳴らすドライバーがいます。私はある雨の日、街中の交差点を走行中、傘をさした女性がいきなり飛び出してきて、心臓の止まる思いでブレーキを踏んだことがあります。その人はこちらの思いとは無関係にそのまま走り去っていきましたが、私はトンカチで頭を叩いてやりたくなりました。一旦事故が起きれば、ドライバーの責任は間違いなく問われます。この様な経験を、多くのドライバーは何度となく繰り返しています。その結果、歩行者を保護しよう、仲良くやっていこうという気持ちも無くなってしまいます。

でもこの様な仕組みは、道路・交通行政にかかわる多くの方々も良く知っているのだと思います。それを変えられない理由が、日本人と言葉の関係にあると思ったのです。これだけ交通事故が大きな社会問題となり、ドライバーの交通マナー

新着図書 ―― 経済・法律関係

難民移民出稼ぎ　人々は国境を越えて移動する／中岡三益編　**バス車掌の時代**／正木鞆彦著　**「非労働時間」の生活史　英国風ライフ・スタイルの誕生**／川北稔編　**生活保障の政治学　スウェーデン国民の選択**／竹崎孜著　**福祉国家と市民社会　イギリスの高齢者福祉**／武川正吾著　**富と貧困の政治学　共和党政権はアメリカをどう変えたか**／ケヴィン・フィリップス著　**ソ連社会保障発達史　歴史と現状**／柴田嘉彦著　**キリスト者社会福祉事業家の足跡**／三吉明著　**技術が労働をこわす　技術の復権**／渡植彦太郎著　**仕事が暮らしをこわす　使用価値の崩壊**／渡植彦太郎著　**福祉と協同の思想**／池上惇著　**製糸労働争議の研究　同谷・山一林組争議の一考察**／松本衛士著　**英国の福祉　ソーシャルワークにおけるジレンマの克服と展望**／ビル・ジョーダン著　**グラムシと二〇世紀の思想家たち**／片桐薫著　**協同組合運動の新しい波**／社会運動研究センター編　**スウェーデンの社会政策　分かち合う福祉**／J. ナセニウス、K. リッテル共著　**労働組合が倒産する**／奥井礼喜著

にも優しく

工学部土木工学科
堂柿栄輔

の悪さが指摘されている中で、路上駐車を積極的に認めます、速度規制は撤廃しますなどということを、責任ある立場の方はとても言えない。その真意を説明する前に、「あなた路上駐車が増えることを望んでいる」、「あなたは暴走運転が増えることを望んでおり、交通弱者の敵だ」となるのでしょう。つまり言葉の意味が、「その人がそれを望んでいる」となってしまうのです。だから標語が求められるのです。恩恵は受けながら、ドライバーの違法行為やマナーの悪さを嘆くことが、善良な市民の証であるかのような雰囲気は、問題の解決にはなりません。交通弱者はいません、時と立場を変えて皆そうなります。強いて言えば緑ナンバー自動車の運転手が交通弱者ではないかと思います。

言葉の理解とは離れますが、日本の交通安全(運動)はドライバーにとって理解のしにくいものです。あまりに無意味な施策が多いので、一つの仮説を立ててみました。それは、「交通安全の目的は、悲惨な事故への対応ではなく、それに関わる組織を維持していくことにある」と考えるのです。この様に考えると、無意味とも思える多くの施策を説明できます。熱心にやっているというポーズが問われるのですから、沿道になびく黄色い旗の列、標語の掲示、見通しの良い道路での追い越し禁止区間の多さ、免許証の更新手続きの費用等々です。またマスコミがこの問題を常に感情的に報道する理由もわかります。交通事故は常にセンセーショナルに扱われなければならないのです。米国(ニュージャージー州)に半年居た間、私はテレビや新聞で交通事故のニュースを見たことがありません。一度スクールバスと列車が衝突し、惨事になったときにはニュースになりましたが、マスコミもことさらその悲惨さを説くことはしません。事故は必ずおきるものであり、おきた後の対応は重視され、米国では保険制度がきちんとしています。その代わり保険料の高さは嘆いていました。ニューヨーク市内で帰宅時間帯に見た路上の光景は、強く印象に残っています。迎えにきた運転手を助手席に移らせ、要職にある人が自らキャデラックを運転してさっそうと帰っていく姿でした。交通安全を担当する行政部局の人が、その間は自動車の運転を控えるのとは対照的です。

社会的地位のある議員さん、市長さんもお医者さんも、皆自動車を快適に運転できるような交通の管理と運用方法の提案が私のテーマです。

(どうがき・えいすけ　工学部教授)

経済・法律関係 —— 新着図書

激論！　企業社会　過労死と働き方を考える／森岡孝二編　**日本の公害史**／神岡浪子著　**21世紀の憲法　ドイツ市民による改正論議**／クラトーリウム編　**PL法(製造物責任法)の知識とQ&A**／木ノ元直樹著　**政治学入門**／阿部斉著　**現代家族法　夫婦・親子**／野田愛子著　**働く女たちの裁判　募集・採用からセクシャル・ハラスメントまで**／大脇雅子著　**人権**／樋口陽一著　**EC独占禁止法**／正田彬著　**強者の論理弱者の論理　その契約は正義か**／木村達也著　**マスメディアと著作権　著作権トラブル最前線**／豊田きいち著　**判例から学ぶ著作権**／北村行夫著　**新しい労使関係のための労働時間・休日・休暇の法律実務**／安西愈著　**刑事訴訟法**／渥美東洋編　**取締役の損害賠償責任**／近藤光男著　**社会的正義論の再検討**／デヴィッド・メイペル著　**独占禁止法**／実方謙二著　**民法総則**／本城武雄、目崎哲久編著　**教育法と教育行政の展開**／室井修著　**ベトナム民法　条文と解説**／鈴木康二訳　**(論点)社会保障法**／清正寛、良永弥太郎編著　**現代民事法案内**／吉田真澄著　**経済規制と違憲審査**／藤井俊夫著

調査地

このところ、夏休みを中心として2、3カ月ほどパプアニューギニアや東南アジアへ仕事で出かけることが続いています。仕事の中身は人類学調査なので、都会は調査許可取得のために数日間滞在するだけで、ほとんどの期間は僻地の村落で一人で過ごすことになります。村での生活では、日本語を話したり読んだりする機会はほとんどありません。唯一の楽しみはラジオジャパンの短波放送なのですが、時にはどうしても本が読みたくなります。その時のために、いつも日本から本を2、3冊持っていくようにしています。そこで、調査地での読書について、私の体験をお聞かせしようと思います。

まず、どんな本を持っていくかが、調査準備の大きな問題になります。一番に考慮しなければならないのは重さです。文部省から支給される旅費にそれほど余裕のあろうはずはなく、飛行機の重量制限をオーバーして超過料金を徴収されることだけは避けたいのです。そうなると、どうしても文庫や新書に限られてきます。つぎに内容の選択ですが、これがまた大問題です。調査地での読書の目的は、新明解国語辞典の定義にあるような高等なものではなく、単なる娯楽のためです。しかし、優良な推理小説やホラー小説などは、本当は大好きなのですが、読み出したらやめられずに滞在2、3日で読了などということになるので危険です。また、面白すぎると宿舎（といっても小屋ですが）にこもりっきりになって、仕事を怠けてしまいます。近代文化人類学の父であるブロニスラウ・マリノウスキーも、小説を夜通し読んでしまい調査がなかなか進まないので、これからは小説を読まないようにする、つまり、禁書の誓いを何度も日記に書いています。かといって、難解な本は読む気にはなりません。また、私の大好きな東海林さだおの丸かじりシリーズもいけません。毎日焼きバナナや焼きデンプンだけの食事で禁断症状が出ている時に、うまい食い物の話などを読むと、欲求不満が高じて壊れてしまいます。ですから、適度に面白く長持ちする本が一番いいわけです。この頃は、「東海道中膝栗毛」や「醒睡笑」など、近世の滑稽本を持っていってます。

さて、つぎはいつ読むのかという問題です。私は日本ではたいていナイトキャップがわりに毎晩ミステリーやホラーを読んでいます（しばしば、覚醒剤的効果をもたらし朝まで読み続けることもあるのですが）。しかし、村には電気が通じていな

新着図書 ――経済・法律関係

現代株式会社法／大賀祥充著　**手形法・小切手法要論**／蓮井良憲編著　**生活法学入門**／佐々木和夫著　**刑法講義**／斉藤信宰著　**(論考)憲法学　1**／榎原猛編著　**戦後政治と日本国憲法**／永井憲一編　**21世紀の憲法　ドイツ市民による改正論議**／クラトーリウム編　**刑事政策概論**／藤本哲也著　**追跡!!　北海道庁裏金**／北海道新聞社編　**現代憲法学の論点　判例から学説へ**／高乗正臣、佐伯宣親共著　**企業法総論　企業主体と活動に関する一般的規制**／加藤良三編著　**服務・勤務時間・休暇関係質疑応答集**／日本人事行政研究所編　**図解による法律用語辞典**／自由国民社　**自由と権利　政治哲学論集**／ジョセフ・ラズ著　**プライバシーvsマスメディア　事例が語る新しい人権**／村上孝止著　**分権社会の創造　国家主権打破へのシナリオ**／並河信乃編　**正論自由　1－10**／中村勝範著　**労使関係白書30年史　白書にみるわが国労使関係の軌跡**／社会経済生産性本部　**現代商法**／梶山純、川村正幸編著　**自社株取得の実務商法・証取法・税法の取扱い**／並木俊守著　**刑事法入門**／山中敬一著　**行政改革の視点**／増島俊之著

での読書

人文学部
須田一弘

いことが多く、就寝前の読書はまったく不可能です。もちろん酒もなく、寝る前の楽しみは短波ラジオだけです（そんな時に、一度、ラジオから加藤登紀子の「帰りたい帰れない」と北島三郎の「帰ろかな」が流れてきて壊れそうになったことがありました)。ですから、日中の暇なときが読書の時間ということになります。ただ、日中は仕事（調査）との兼ね合いもあります。本当は暇など作らず、調査に没頭すればよいのですが、なかなかそうはいきません。そんな怠け心が頭をもたげた時に、どちらかというとうしろめたい気持ちで読書をするわけです。マリノフスキー先生ですら読書にかまけて仕事をしなかったじゃないかと、そんな時だけ偉大な先人を引き合いに自分を正当化しています。大量に本を持っていくととんでもないことになる可能性があるわけです。

最後は、読んだ後の本の後始末です。衣類や食器、文房具など調査地に持ち込んだ生活用品は、パンツを除いて、村を発つ日に村人にプレゼントしてくるのですが、日本語の本を置いてきても彼らの役には立ちません。しかし、帰りも重量制限が気になるので、持ち帰るわけにはいきません。最初のうちはどうしたらよいか考えていたのですが、後から有効利用を思いつきました。私の住んでいる小屋にも村人同様、炊事用の囲炉裏があります。村人は一度着火すると、たえず薪をくべたすので火種を絶やすことはありません。マッチが大変な貴重品だからです。しかし、私の小屋ではそういうわけにはいきません。いつも使用しているわけではないので、毎日火を起こさなければなりません。実は、これが結構大変なのです。マッチを無駄にしないことを優先し、薪に着火するには、紙などのたき付けがどうしても必要になります。そこで、日本から持ってきた文庫本を一日に5、6枚づつ破ってたき付けにするようにしました。これだとなかなか火の着きがいいのです。また、たき付けにするために毎日どうしても10ページぐらいは本を読まなければいけなくなるわけで、読書の格好の口実ができるわけです。

帰国後は反動から、2、3日は家にこもりっきりでミステリーやホラー、丸かじりシリーズなどを読み続けています。そのせいか、ますます難しい本は敬遠するようになってしまいました。ちょっと困っています。

（すだ・かずひろ　人文学部助教授）

経済・法律関係――新着図書

(エッセンシャル)法学／大谷実編著　**手形・小切手法**／川村正幸著　**無体財産権法概論**／紋谷暢男著　**政治学入門**／阿部斉著　**弁護士という人びと**／浜辺陽一郎著　**戦後政治にゆれた憲法九条**　**内閣法制局の自信と強さ**／中村明著　**概説西洋政治思想史**／中谷猛、足立幸男編著　**幕末維新政治史の研究**　**日本近代国家の生成について**／井上勝生著　**労働法　2**／西谷敏、万井隆令編　**紛争解決と国連・国際法**／西川吉光著　**それぞれの人権**　**くらしの中の自由と平等**／憲法教育研究会編　**卒論・ゼミ論の書き方**／早稲田大学出版部編　**社会保障の財源政策**／社会保障研究所編　**行政指導の政治経済学**　**産業政策の形成と実施**／大山耕輔著　**国際機構論**／最上敏樹著　**(資料)現代行政法**／紙野健二、市橋克哉編　**日本国憲法　資料と判例　1**／現代憲法研究会編　**民法　3**／内田貴著　**政治思想史**／柴田平三郎著　**政治思想史講義**／柴田平三郎著　**エネルギー生産・需給統計年報平成7年**／通商産業大臣官房調査統計部編　**産業連関表(延長表)1993**／通商産業大臣官房統計部編

中小企業をみる眼

◉経済学部
山　田　誠　治

今日「平成不況」打開のため、規制緩和政策の導入とともに中小・ベンチャー企業を育成し、情報分野や医療・福祉等の新産業分野を創出することによって新しい成長経済を、という考え方が一つの潮流となりつつある。学生起業家や国立大学での産学協同によるベンチャー・ビジネス育成等の動きが、この北海道でも起きつつある。

しかし、中小企業の新規開業やベンチャーが活発なアメリカと比べ、日本ではまだまだ活性化していない。その障害となっているのが、「インテリ」好みの「二重構造論」的中小企業観（すなわち「進んだ大企業」と「遅れた中小企業」）なのではないか、とする議論がある。『中小企業積極評価派』からの批判である。実際、旧帝大で日本中小企業学会に所属する研究者は皆無であった。また、ジャーナリズムでも、中小企業は「弱者」として扱われ、「中小企業でも仕方がない」「しょせん中小企業しか」という「デモシカ中小企業」は一つの通念になっている。学生の就職でも、知名度の高い大企業（本学の場合は、そこに「公務員」が入るのか？）を選ぶという一種の「ブランド指向」は多々みられる。

これらすべてが、「インテリ」大学教員・ジャーナリズムや親たちが描く、進んだ大企業と遅れた中小企業という単純な「二重構造論」的中小企業観の結果だ、と批判するのである。

これに対し、中小企業の現実を見ない極論だ、一部の成長企業のみに注目し、弱い中小企業・ヤル気のない企業と強い中小企業を差別・選別し、大企業中心の経済構造から生じる中小企業問題から眼をそらせている、などの批判が、『中小企業問題性認識派』にはある。また両派をまとめようと、分析の「複眼的方法」を強調し、中小企業は総称して「異質多元である」とまとめあげる『総括派』も現れている。

こうしたことで百家争鳴的状況の決着はつきそうにない。学問的な体系性が問われている、とも言えそうだ。ただ、中小企業は日本の大企業中心の経済社会構造に規定され、所詮企業家的努力をしても大企業にかなわない、という認識が、意欲・能力ある人間を中小企業に向かわせず、その結果人材面で中小企業をより苦しめる、というのも一面の真理である。中小企業研究者の主体と客体、および構造と個体の関係、という古くて新しい研究上の問題が伏在しているのである。少なくとも「弱者」がいるから、インテリが「後見主義」者として存立できる、とまで悪口を言われてはたまらないが……。

（やまだ・せいじ　経済学部助教授）

新着図書 ――人文・工学関係

冷泉家時雨亭叢書　第44巻　撰要目録巻、宴曲集、宴曲抄、解題（伊藤正義著）／冷泉家時雨亭文庫編
（岩波講座）日本文学史　第7巻／久保田淳編　**日本の名随筆　別巻　66　方言**／清水義範編　**西郷竹彦文芸・教育全集　第8巻　文芸の世界　2　童話・物語**／西郷竹彦著　**（岩波講座）日本文学史　第2巻　9・10世紀の文学**／久保田淳編　**日本の名随筆　別巻　65　家出**／小山内美江子編　**西郷竹彦文芸・教育全集　第7巻　文芸の世界　1　口承文芸**／西郷竹彦著　**ユネスコ世界遺産　10　南ヨーロッパ**／ユネスコ世界遺産センター　**日葡辞書の研究**／今泉忠義著　**伊曽保物語　天草本**　Esopono Fabvlas, ed by society of fesus (in Amakusa), 1593.／今泉忠義編　**外国語と日本語（杉本つとむ日本語講座6）**／杉本つとむ著　**日本語論考**／大島一郎教授退官記念論集刊行会編　**源氏物語の敬語法**／大久保一男著　**平安時代敬語の研究　森昇一論攷集**／森昇一著、中村幸弘編　**教科書の効果的な活用法（ロングマン英語指導のキーポイントシリーズ　1）**／ネビル・グラント著　塩沢利雄監訳

古辞書展 (図書展示会 No.25)

《元時代の漢字辞書から明治時代の英和辞書まで》

期間：平成8年12月9日～9年2月28日
場所：図書館1F自由閲覧室

西暦

1351　六書正譌（りくしょせいか）／（元）周伯埼編注　至正11　木版　5巻4冊　古香閣蔵板　中国元時代の古漢字辞書。

1575　本朝事始（ほんちょうことはじめ）上・下／藤原通憲（信西）撰　天正3　2巻1冊（9丁）写本　わが国の事物起源事典。

1617　和名類聚鈔（わみょうるいじゅうしょう）／源順著、元和3　木版　20巻5冊　わが国最初の分類体の漢和辞書。

1643　新版　拾芥抄（しゅうかいしょう）／〔洞院公賢編補〕〔寛永19〕　木版　3巻6冊　成立は南北朝初期で有職故実の事典。

1666　訓蒙図彙大成（きんもうずいたいせい）／中村煬斎　不明　木版　21巻11冊　寛文6　絵入り百科事典。

1680　節用集大全（せっようしゅうたいぜん）　延宝8　木版　7巻10冊　江戸時代のイロハ順引き漢字辞書（字引）。いろは順の漢字の字引である節用集は、室町時代から始まって、江戸時代に盛んになり、大正年間まで広く庶民に愛用された。

1756　Dictionary of the English language. In 2 vols / Samuel Johnson (1709-84). London, Printed for J. Knapton et. al., 1756. / repr. ed.; published in 1985 by Kenkyusha Limited, Tokyo. 復刻版　著者は、18世紀の文豪。

1858　和蘭字彙（オランダじい）／桂川甫周（国興）　安政5　木版9巻9冊　A－Z　蘭和（オランダ語）辞典。幕府の侍医桂川甫周（国興）が、閉門、打ち首も覚悟で刊行したが、外国船の来航があいついだ当時の世情を反映して飛ぶように売れ、幕府から褒賞を受けるという時代の変わりようであった。

1864　佛語明要（フランスご　めいよう）／村上英俊著　元治元　木版　4巻付録1巻　5冊　わが国で最初に刊行された仏和辞典。368丁、3万5千語を越える本格的な辞書。英俊は江戸の医師で維新後、東京でフランス語の塾、達理堂を開き、中江兆民らを教えたフランス語の始祖。

1867　A Pocket dictionary of the English and Japanese language. 改正増補　英和對譯袖珍辭書／堀達之助編、堀越亀之助増補。再版　江戸、開成所、慶応3（1867）木版　文久2年（1862）に幕府直轄の洋書調所で刊行した堀達之助編「英和對譯袖珍辭書」（953p.）の改正増補・再版（998p.）B6版を横にした大福帳のような厚い本のため、枕辞書とあだ名された。――（略）

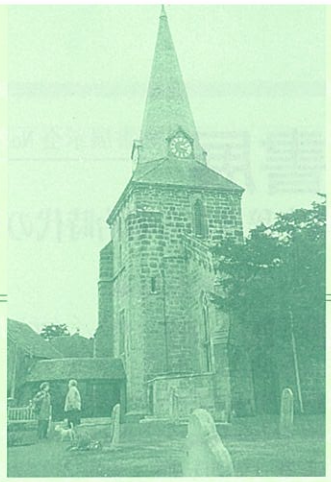
1903　Полный Русско－Японский словарь 増訂露和字彙／原文文部省編集局蔵版、古川常一郎増補訂正　東京、丸善株式会社、明治36／初版・明治15　文部省が編集した日本最初の露和辞典。

ほか、主に北駕文庫から貴重古文書40冊余りを成立年順に展示、解説。

人文・工学関係――新着図書

ティーム・ティーチングの進め方／シーラ・ブランビー、和田稔著　塩沢利雄監訳　**冷泉家時雨亭叢書 第34巻　中世私撰集・中世百首歌**／冷泉家時雨亭文庫編　**日本の名随筆　別巻　59　感動**／秋山ちえ子編　**日本の名随筆　別巻　64　怪談**／高橋克彦編　**西郷竹彦文芸・教育全集　第6巻　美と真実の教育**／西郷竹彦著　**（岩波講座）日本文学史　第13巻　20世紀の文学　2**／久保田淳編　**家（住まい学大系　076）**／安藤忠雄著　**霊魂をめぐる日本の深層（角川選書　271）**／梅原猛、中西進編　**芸術としての建築（SD選書　224）**／S. アバークロンビー著　**地盤工学研究発表会発表講演集　平成8年度**／地盤工学会　**DNAが語る稲作文明　起源と展開（NHKブックス　773）**／佐藤洋一郎著　**思春期のこころ（NHKブックス　774）**／清水将之著　**深海生物学への招待（NHKブックス　775）**／長沼毅著　**名勝唐詩選　下（NHKブックス　771）**／高木重俊、石嘉福著　**Windows　95の基本操作　上、下（ビデオマニュアル[Windows Master]シリーズ20、21）**／アルファミュージック株式会社

ジョンバチェラー博士の郷里を訪ねて（1）



Holy Cross
教会

Cornish 篁子

ある秋も深い日、私はロンドンの南駅の一つチャリングクロスから汽車に乗って、サリー州アクフィールドを訪ねてみた。二時間足らずの道のりである。そこはオックステッド東線の終着駅だが、ケント州と並んで英国でも中産階級の温室だと言われるサリー州の小タウンらしく小綺麗な建物があるという訳でもない。無人の、改札口ともつかないプラットフォーム端の木戸口を、ほんの幾人かの降車客について出た。

町の佇まいは、しかし、意外と活気があり、目的の Uckfield Parish Church, HOLY CROSS へ行く坂道の両側には商店が立ち並び、車の往来も繁く人出も多い。所どころ古色蒼然とした建物が地方裁判所であったりして優雅な趣をくわえている。── 鉄道の寂れようは、日本と同じ車社会の出現によるものなのだ。慢性赤字で吐息をついている国鉄はロンドン市内を走る鉄道駅でさえ手入れをし得ない。

丘をつきたあたりに燻んだジョージアン風家屋があった。脇にまわると図書館になっている。資料室に通してもらって、先ずこの町が出した傑人 JOHN BATCHELOR を郷土の歴史上人物としてどのくらい評価しているのかということを調べることにした。残念なことに目星いものはなく、1975 年エリザベス女王訪日を記念して在英日本大使館が出した BRITAIN & JAPAN 1600-1975-British Personalities からコピーした簡単な履歴文と、同じく 1975 年 HOLY CROSS 教会前庭に建立された記念碑公開日に集まった人々の記念写真、地方新聞の短い記事などである。いずれも余り写りの良くない複写であるが日本から参加の大友ジェローム司祭の笑みが印象的だ。開碑日は日曜日で朝のミサと共に memorial service が行われその Dedication のコピーもあった。

こういった資料は、〝アイヌの父〟を書かれ、〝わが人生の軌跡〟（Steps by the way）を訳されたバチェラー研究の権威、仁多見厳氏などには全て二番煎じのものかもしれないが、私はその少なさに失望しながらも丹念に読んだのである。図書も保存していなかった。これは、Uckfield 近くに住むバチェラー縁者の人達が彼の死後ロンドン大学東洋アフリカ学研究所（School of Oriental and African Studies）と Cambridge Press に寄贈しており地元の図書館を素通りさせたからだと思える。

ことほど左様に、ソアス図書館には八書籍（次

新着図書 ── 教養・一般

日々のドイツ語会話／ゲルハルト・ハックナー編著　**ベストガイド日本の名著　明治～平成**／小田切秀雄編　**インターネットの英語術　ネチズン時代のコミュニケーション常識**／土屋晴仁著　**だれがあなたの世話をしますか　超高齢化社会の姿**／津山千恵著　**世界の奇書・総解説　不思議を体験するめまいの読書百科**／自由国民社　**電子図書館の神話**／ウィリアム・F. バーゾール著　**（新）ロシア語会話教本**／宇多文雄、吉住エレーナ著　**できることからボランティア　若者の新世紀ルネッサンス**／福岡政行編著　**『ニーベルンゲンの歌』の英雄たち**／W. ハンゼン著　金井英一、小林俊明訳　**（岩波講座）ソフトウェア科学　15　自然言語処理**／長尾真編　**アジア時代の検証中国の視点から（朝日選書　547）**／国分良成著　**イギリス歴史の旅（朝日選書　548）**／高橋哲雄著　**ロバート・オッペンハイマー　患者としての科学者（朝日選書　549）**／藤永茂著　**ボランティアという生き方（朝日選書　550）**／ロバート・コールズ著　池田比佐子訳　**岩野泡鳴全集　第 11 巻**／岩野美衛著

回にて紹介）ある。

さて1940年、63年滞在した日本を後にし、戦況悪化する中しばしカナダに寄寓そこからポルトガルを経てようやくイギリスに辿りついたのが1943年である。そして郷里Uckfieldに落ちついたのも束の間、翌年の4月に亡くなっている。

お墓もあるHOLY CROSS教会に足を運ぶ。穏やかな秋の日差しの中に碑はあった。バチェラー博士はその最後の日々を、〝わが人生の軌跡〟で回顧した村の鍛冶屋を覗いたり木株に腰を下ろしてみたりしたのであろうか。私は次の手がかりを求めて思いを巡らせている。次回を御期待いただきたい。

(セツコ・コーニッシ　ロンドン大学　East Asia Dept. Lecturer、ロンドン在住)

SURREY州　アクフィールド町のHoly Cross教会前庭バチェラー師記念碑と筆者

英国研究資料の寄贈

British Studiesの図書資料が贈られました

英国大使館文化部ブリティッシュカウンシルよりBritish Studies（英国研究）関連図書、雑誌約120点とビデオテープ、音声テープ約50点が本学に寄贈されました。世界各地で英国文化の普及に努めるブリティッシュカウンシルが英国と縁のある大学に図書の寄贈を申し出たもので、本学もその趣旨を理解し多数の貴重な資料を頂戴することになりました。British Studiesは、英国の社会情勢から政治、経済、法律、歴史、民族、言語、文化、芸術、宗教等に至るまで、英国に関する事柄の研究領域ですが、この度の資料も基本的な内容の図書、雑誌から専門書まで揃っており、学生にとっても研究者にとっても貴重な情報資源となるでしょう。このほか、留学情報誌や観光ガイドブックのような実用書、さらに英国の社会や英国人等についての分かりやすいビデオも多数贈られ、学生の独習用に、また講義の補助教材として大いに利用させてもらえそうです。現在整理中ですが、登録作業が済みしだいご利用になれます。

教養・一般――新着図書

ハンス・カロッサ節集　第10巻／ハンス・カロッサ著　**フランス史　2(世界歴史大系)**／柴田三千雄編　**中国史　2(世界歴史大系)**／松丸道雄編　**ドイツ史　2(世界歴史大系)**／成瀬治編　**大日本古文書　家わけ第21[之6]**／東京大学史科編纂所編　**真田昌幸(人物叢書　新装版)**／柴辻俊六著　**人生の価値について(新潮選書)**／西尾幹二著　**禅がわかる本(新潮選書)**／ひろさちや著　**いのちの文化人類学(新潮選書)**／波平恵美子著　**大日本近世史料　市中取締類集　22**／東京大学史科編纂所編　**大日本近世史料　細川家史料　15**／東京大学史科編纂所編　**大日本史料　第3編之24**／東京大学史科編纂所編　**大日本史料　第6編之43**／東京大学史科編纂所編　**大日本古文書　家わけ第18[之16]**／東京大学史科編纂所編　**やきものの鑑賞基礎知識**／矢部良明編　**浮世絵の鑑賞基礎知識**／小林忠、大久保純一著　**インターネットの英語**／小林敏彦著　**(定本)野口雨情　補巻**／野口雨情著　**日本の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブック　無脊椎動物編**／環境庁自然保護局野生生物課編

牛乳五勺ココア入り 心に花を添えてあり

―― 放哉(さい)―山頭火清貧対話

聖生活時代

四国知求紀行④

放哉

幾度も　雪の深さを　たずねける

子規の句にならって、我々も、

降る雪に子規の深さをたずねける

山頭火

おふくろさんに、熱いタオルで背中をふいてもらっている子規の姿が眼に浮かびますなあ。

僕の母なんか、父の放とうの故に、井戸に身を投げた。悲惨でむごい光景でした。

切れましたね。あとは「ごはん　みそ汁　つけもの」の生活。

放哉

うーん。全くね。

でも、偉人とはえてしてそういうところがある。

降る雪に母の面影を探したトルストイ。

養子に出されて母を恨んだ漱石。

山頭火

降る雪や　明治は遠く　なりにけり。

本当に明治は遠いんでしょうか。

今にあって、子規がそこにいるような気がします。

放哉

竜馬が暗殺された、

1867年11月15日。

まさにその時、子規は松山にあって1カ月の生を授っていた。

漱石は10カ月でしたね。

山頭火

20にして東大を去った早熟の天才子規。

40にして東大を去った晩熟の天才漱石。

彼らは共に野の人となって人を育てる。

放哉

左千夫と節の出現は子規にとっては意外でしたね。彼らの「節度の文学」は『アララギ』を創る。

漱石山脈の三重吉は『赤い鳥』を、そこから白秋、雨情、八十が出た。

山頭火

子規はいつか、漱石を鴎外に紹介しましたね。あれはやはり子規の視野の広さでしたろう。

放哉

「第二芸術論」。これちょっと逆じゃあないでしょうかね。俳句はむしろ「ロマン」を生む。

漱石がそうだし、あの泥濘(ねい)の「人生中学」の中で、『ホトトギス』を垣間見た吉川英治。

山頭火

子規はいつも「牛乳五勺ココア入り」を好んでいた。その時はいつも「心に花を」添えていましたね。

放哉

うん。そうそう。

元旦や　一輪開く　福壽艸(ふくじゅそう)

22歳の句ですがね。子規は、花に風、星に雪、そして、あの白い雲の中にも生きているんですよ。

新着図書 ―― 教養・一般

仏画の鑑賞基礎知識／有賀祥隆著　**曼荼羅の鑑賞基礎知識**／頼富本宏著　**日本刀の鑑賞基礎知識**／小笠原信夫著　**寺社建築の鑑賞基礎知識**／浜島正士著　**日本建築の鑑賞基礎知識　書院造から現代住宅まで**／平井聖、鈴木解雄著　**郵便博物館**／山口修編　**図説世界の宗教大事典**／荒木美智雄、田丸徳善監修　**かなの鑑賞基礎知識**／古谷稔著　**仏像彫刻の鑑賞基礎知識**／光森正士、岡田健著　**幾山河　瀬島竜三回想録**／瀬島竜三著　**昭和の文化遺産　第1巻ー第10巻**／井上靖、河北倫明監修　**ふるさとの伝説　1ー10**／伊藤清司監修　**渡辺淳一全集　第19巻　桜の樹の下で　野わけ**／渡辺淳一著　**渡辺淳一全集　第5巻　阿寒に果つ　冬の花火**／渡辺淳一著　**渡辺淳一全集　第7巻　遠き落日　他四編**／渡辺淳一著　**渡辺淳一全集　第8巻　流氷への旅　氷紋**／渡辺淳一著　**アメリカズ・カップ　レーシングヨットの先端技術(岩波科学ライブラリー　40)**／宮田秀明著　**広島(日経都市シリーズ)**／日本経済新聞社編　**日本語音声の研究　3**／杉藤美代子著

寿（ことほ）ぎの国から

愛媛県

文運は南海の彼方、伊予、松山にあり

「文運は南海の彼方にあり」。

今を去る100年前。

1897年（明30）、1月15日。

松山で創刊された「ホトトギス」誌上、子規は高らかにそう宣言した。

それから3年後。

1900年（明33）、10月30日。

33歳の子規はさらに「ホトギス」誌上で、「維新の大業が薩長土肥の田舎者」が成したとすれば、「文学のルネサンス」も又「田舎者」たる「我々」によって成されればならぬ、と書き、「どこまでも野暮を通して斃れて已む」。

この決意は頂度、漱石が留学先のロンドンに到着して3日目のことである。

都会人、漱石は自分が、

「今頃、山奥で高い木に登り、椎の實を落としているだろう」と指摘されている「田舎者」とは思っても見ない。

3年後、1903年から4年にかけての、帰路の船旅の50日が、漱石を変えることになる。

「そうだったのか」。

眼前に海原がある。

「子規は、この都会人ぶっている俺を木から落として田舎者になれと言っていたのは、この俺の偉大を信じてのことだったんだな」。

漱石の眼に涙があふれ出た。

すると、「気が楽に」なった。

この時、文豪漱石の誕生があったのではないか。

後に作家の方程式を説明して、「猫党」にして「滑稽的＋豆腐屋主義」と言ったのは、まさしくユーモアで質実剛健の「田舎者主義」そのものであったのだ。

1905年（明38）から1906年（明39）にかけて、つまり、漱石38歳から39歳の間、「ホトトギス」誌上に発表した『吾輩は猫である』（11回連載）と平行して、あの「青春3部作」、『坊ちゃん』『草枕』『二百十日』を書く。

「生と死をかけて、維新の志士」のごとく進む決意こそあの子規の血を吐く「ホトトギス」から出たと言っていい。

その生涯の最後の10年に300年分の仕事をした漱石は子規の「遺言」に立派に報いたと言える。

100年後、大江健三郎は「ノーベル文学賞」に輝いて、今日も健在。『敗北の文学』を書いた若き宮本顕治が松山を通過したのは、決して偶然ではないだろう。「飯が食えん」と言って東大を去った英文学の中野好夫。北に自由主義教育のフロンティアを啓いた城戸幡太郎。漱石山脈の安倍能成。内村山脈の矢内原忠雄。

春やむかし　十五万石の　城下哉

ミカン畑と予伊の海。子規の春はすぐそこだ。

（完）

教養・一般――新着図書

情報を市民に！ 公開法制定の論点（岩波ブックレット no.404）／朝日新聞社会部メディア班著　**24時間巡回型介護サービス（岩波ブックレット no.405）**／岡本祐三著　**本多勝一集　第15巻　美しかりし日本列島**／本多勝一著　**アインシュタインの世界**／フランソワーズ・バリバール著　南条郁子訳　**（解説）実務書式大系　16　知的財産権　1 特許・実用新案・意匠・商標**／辰巳直彦編　**（解説）実務書式大系　17　知的財産権　2　著作権・回路配置利用権**／辰巳直彦編　**中上健次全集　13　未完小説集　2**／中上健次著　**中上健次全集　14　評論・エッセイ　1**／中上健次著　**（シリーズ）地域の活力と魅力　第2巻　つどい　イベント、まつり、コンベンション**／岩崎忠夫編　**（シリーズ）地域の活力と魅力　第3巻　味わい　食、特産品**／岩崎忠夫編　**テクノロジーの行方**／吉川弘之著　**世界美術大全集　西洋編　第18巻**／坂本満編　**バッハ　神はわが王なり**／ポール・デュ＝ブーシェ著　**「大東亜民俗学」の虚実**／川村湊著　**達人たちの大英博物館（講談社選書メチェ 81）**／松居竜五著

アラビア紀行②

オマーンの自慢：香水、乳香、水の景観

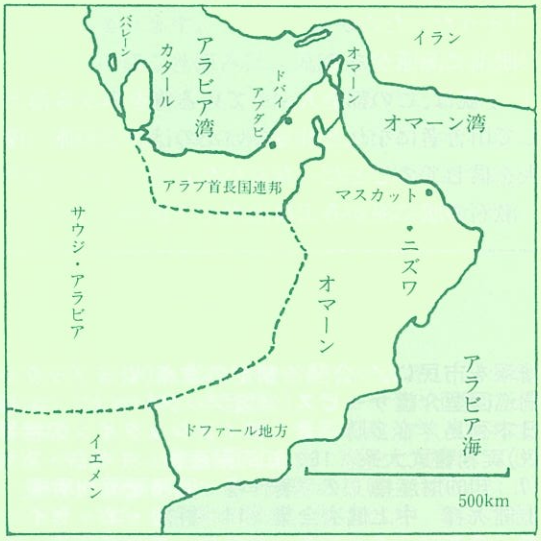
大　江　敏　美

金庫に保管されたVIP（重要人物）の署名簿をのぞき込んだ筆者は、そこに皇太子徳仁（なるひと）殿下、同妃雅子殿下の日本字のご親筆（日付1994.11.10）を発見した。場所は前号で書いたイエメンの東にあるオマーン国（右下図；人口200万、面積日本の75%）の首都マスカットから南西140 kmにあるニズワの砦。砂漠地帯のなかに17世紀に統治と防衛のため築かれた豪族の居城には、平和時代にはオアシスの農業・牧畜に従事している村人たちも、戦争時には逃げ込んで兵士と共に籠城戦を戦った。かくしてアラビア半島の戦国時代を生き残ってきたのが今回訪れたバハレーン、オマーン、UAE（アラブ首長国連邦）の有力豪族達で、現在は国王、首長になっている。これら諸国、各王室との友好関係は日本の石油安定確保にとって絶対的必要性を持つからこそ、日本皇室の足跡がオマーンに残されているのだ。

全世界の女性にとってオマーンは垂涎の的である。世界一高価な香水「アムアージュ」の工場があるからだ。雅子さまのお土産の中にも入っていたはず。アラビア語で波を意味するこの香水は、特産の乳香など120種以上の貴重な原料で作られる(日本では輸入規制により入手できない)。イエメンのシバの国がこの乳香の仲介貿易により、古代のメソポタミア、エジプト、ローマの富を吸い上げたのは、それが彼らの神事・祭事の燻香として金に勝る値打ちをもっていたからである。その生誕時に東方3博士がイエス・キリストに贈ったのは乳香、没薬(もつやく)、黄金であったというのは彼が王者になることの予言であった。マスカットの博物館前に植えてあるボスウェリアという高さ3m位の樹木の白色の木肌に切れ目を入れるとヤニが出てくる。それを集めて精製したものが乳香で、南オマーンのドファール地方で最高品質のものがとれる。量的には乳香にもまして、湾岸各国の経済活力となっているのは原油である。

UAEのアブダビからマスカットに至るハイウェーの両側に砂防林として植林されているのはナツメヤシ、ヘンナなどで、その根元に埋められた黒色の細いパイプの穴から点滴式に水が補給されている。砂漠が大部分のオマーンでは地下水源が少なく41基の海水脱塩プラント（91%は蒸発法、残りは逆浸透膜法など）が日産1億立米の淡水（料金￥170/立米）を生産する。日本の水道料金は￥330/立米からその十分の一と地域価格差があるが、この淡水が安いのは石油火力発電所の廃熱と安い石油を利用するから。オマーンはじめ湾岸諸国の市街地には人工の滝、噴水、スプリンクラーなどの水の乱舞が豊かな景観を作り出し、人々を和ませる。この水と石油ビジネスのおかげでモダーンなモスクや摩天楼が立ち並び、町中には緑が溢れ、技術者、説教師、教員、兵士、店員、3K労働者などとして外国人が雇用され、その送金でかれらの国元が潤っている。

（おおえ　としみ　教養部教授）



北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.18　No.4（通巻140号）
本館　〒062　札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　工学部図書室　〒064　札幌市中央区南26条西11丁目
☎（011）841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード